

【2015年度 RFLJ プロジェクト未来 助成研究者の横顔 2 明智龍男先生】

第2弾は「患者・家族のケアに関する研究」（Ⅱ分野）よりご紹介致します。

◆名古屋市立大学大学院医学研究科 精神・認知・行動医学分野 明智 龍男先生

◆研究テーマ「小児がん患者・家族に対する新たなサポートシステムおよびケア方法の開発研究」

◆助成金額 50 万円

1. 研究者になろうとしたきっかけ

私は以前、がん専門病院で精神科医、精神腫瘍医としてがんの患者さんとご家族のこころを支援する仕事をさせていただいておりました。

その際、最初に、もっとも悩んだのが、死を前にした進行・終末期のがん患者さんから発せられる「死にたい」という言葉をどう理解し、どのように援助すればよいかということでした。

私が出会った多くの患者さんは死を目前にし、身体の衰弱がすすみ、痛みや倦怠感を有しており、

自分自身のそれまでの知識や経験で患者さんを理解し援助するには遠く及びませんでしたし、役立つ論文もほとんどありませんでした。

それをきっかけに自分自身で、わが国の患者さんを対象にした臨床に役立つ研究をしなければ、と思ったのがきっかけです。

2. 助成研究の内容紹介

この研究は、心理社会的苦痛を抱える小児がん患者さんとご家族のための効果的なサポートやケアを開発するための研究です。

小児がんは、がん治療の進歩に伴い、現在では 70%の患者は治癒が見込めるまでに至っています。

一方で、小児がんはこどもの病死原因の第1位で若年者において生命の脅威の原因となる

最も重篤な疾患の一つであることにはかわりありません。

こどもががんに罹患すると、患者さんだけではなく、その家族の全員が危機状態に陥ります。

欧米をはじめとした先行研究では、小児がん患者さんの親が経験するストレス

は、患者のニーズへの対応、
変化する家族生活への対処、経済的問題、精神的苦痛など、多岐にわたることが明らかになっています。

なかでも、主介護者となることが多い母親の精神的苦痛は最も頻度が高く深刻です。

小児がんの診断後の家族の良好な適応は、患者さんの QOL にも影響するため、より早期から家族への適切な支援が求められています。

しかしながら、わが国においては小児がん患者さんの主介護者の精神的苦痛の実態は明らかになっておらず、

心理社会的支援を必要とする対象の把握、効果的なサポートやケアの開発を行う上での知見は極めて限られているといった現状があります。

そこでまず、小児がん患者さんの主介護者である母親における抑うつや不安などの精神的苦痛の頻度とこれらの関連/予測要因を明らかにしたいと考えています。

次いで、これらをもとに、心理社会的問題を抱える小児がん患者さんとそのご家族を早期発見するための

スクリーニングツールと介入プログラムを開発することを目的に研究を行いたいと考えています。

3.2 の将来につながる結果予想

これらの研究は、小児がん患者さんとご家族のために、どのようなサポートシステムやケアが必要なのか、

今後取り組むべき課題や援助のあり方を明らかにするための基礎資料になると考えられます。

さらに、スクリーニングツールや有効なサポートシステムやケア方法が開発されることによって、小児がん患者さんやご家族の QOL 向上につながると期待できます。

この研究によって明らかになった小児がん患者さんとご家族の抱える心理社会的問題の実態を社会に提言していくことで、

わが国の一般国民による小児がんに関する理解や意識が高まり、小児がん患者さんやご家族が、

がんと共にその人らしく生活することを支えるための社会構築に役立つものと

信じています。

4.全国の RFLJ 関係者に一言

私はもともと精神科医なのですが、特にがんの患者さんご家族のこころを支援する精神腫瘍医として働いています。

自身の専門は、がんそのものの生物学的なメカニズムを解明したり革新的な治療を開発したりすることではないのですが、

がんという病を得られても、患者さんご家族がご自身らしく過ごしていただけるよう支援をする、私どものような医療者が

少しずつ増えていることを知っていただければ幸いです。